

## QBS交換留学生・企業訪問



高品質、高性能の日本製品は、世界各国の様々な分野で活躍していることがよく知られています。これらの「Made in Japan」が誕生した日本の工場にはいったいどんなマジックがあるのか、という課題を持って、我々留学生は福岡県北九州市のTOTOと安川電機の工場を見学しました。

TOTOの工場では、衛生陶器の製造プロセスについて、生産ラインを実際に見ながら製造工程の各段階の説明を聞きました。衛生陶器が原材料から最後の完成品までのフローが分かったほか、

TOTOの「ものづくりへのこだわり」も深く印象付けられました。

安川電機の工場で驚いたのは、ロボット製造工程の中に、マンパワーより、産業用ロボットのほうが多く使われているという生産の自動化のことでした。

日本のものづくりの理念が日本の文化、そして日本人の「こだわり」の性格に渾然一体となり、最高の製品を作り出しているのです。我々留学生は、日本の文化を学び、日本のものづくり及び経営理念の精髓を理解し、それからいかに自国の文化に融合させ、ニーズに合わせた良い物を作り出して、人の幸せに貢献できるか、ということが我々の今後の課題だと実感しました。

郭 睿(9期生)



## 学生会の紹介



QBSでの学生生活も気が付けば早半年経ち、2012年10月より私達10期中心の学生会が発足する運びとなりました。

10期の学生会では「伝統と変革～アジアの未来にキセキを残そう～」を掲げ活動を開始しました。

諸先生方、先輩方、関係者の方々から築いてこられたQBS10年間の「伝統」を引き継ぎ、かつ新たな「変革」を起こすことを目指しております。

サブタイトルには各自の「輝石」を磨き、将来への確かな「軌跡」を残し、アジアに未来に「奇跡」を起こしたい、という思いを込めました。

具体的には、図に示す活動を学生会として行います。

1年間という短い期間ではありますが、学生会の諸活動へのご協力を何卒よろしくお願ひ致します。

QBS学生会長 足立 憲正(10期生)



## 伝統

- ・Q&Aのコミュニケーション
- ・各種イベント
- ・留学生との交流
- ・ICABE活動
- ・ビジネスプランコンテスト
- ・インフラ整備活動

## 変革

- ・グローバル人材育成を目指した英語勉強会
- ・ソーシャルメディアを使った広報活動
- ・アイデアからビジネスを生む仕組みを回し知識を実践に生かす知財ファンド運用

## 在校生紹介



長崎喜代美さん(9期生)  
所属  
三菱マテリアル株式会社

QBSでの学生生活も残すところ半年を切りました。残りの時間が少なくなるにつれ、QBSでの学びが如何に得難いものであるかを痛感しています。

私がQBSで得た最大の財産は、共に学び、悩み、笑う「温かい仲間たち」、そして最大の成果は「視野の広がり」です。

授業に限らず、QBS生が集まる場では、すぐにいろいろなテーマで議論が始まります。さまざまなバックボーンを持つ先生方や仲間たちとのディスカッションは、これまでの自分にはない視点や角度・深さで物事を見て考える力を養う絶好の機会です。

また、最後の半年を迎えて初めて、QRECの授業にも取り組んでいます。QBSの学生に加え、他学部の学部生や院生たちと共に学べるQRECは、ますます多様で新鮮な刺激に溢れ、ここでも新たな気づきを重ねています。

この大切な仲間との貴重な時間を無駄にしないよう、最後まで精一杯学び、実り多い2年間にしたいと考えています。



井村 知章さん(10期生)  
所属  
熊本日日新聞社

QBS入学から夏休みを挟んで8カ月が過ぎました。前期講義が始まった頃は予習で四苦八苦。今も状況はほとんど変わりませんが、少し気持ちに余裕ができていく自分に「初心を忘れるな」と戒めているところなんです。

初心とは、経済記者としての知識を深掘りすると同時に、行き詰まっている新聞社のビジネスモデルに新しい光を見出すことです。

入学する前提として熊本の本社から異動希望を出して福岡支社での勤務が実現し、受験しました。

大学院生活は刺激に満ちあふれています。先生方の講義は20数年前の学部生時代と異なり、アカデミックでかつ実践的な内容です。多士済々の同期生にも恵まれました。大半が年下とは思えない意欲と志を持っており、知識の豊富さと行動力に驚きの毎日です。

さて自らはと言うと、少しは変わったとは感じるのですが、具体的にどう変わったかと体系的に言えない現実。「初心、初心」と自ら問い掛ける日々です。

## TOPICS

## QBSビジネスプラン・コンテスト2012 開催

去る9月16日(日)、QBSビジネスプラン・コンテスト2012がチサンホテル博多(福岡市博多駅前)にて開催されました。私は学生で結成した実行委員会の責任者を務めさせていただきました。

本コンテストは組織マネジメント、会計学、マーケティング、企業財務など、普段QBSで学んでいる科目を基にした知識を活用し、新たな価値や事業の創出に結びつける統合能力を習得することを狙いとしています。

主催は九州大学ビジネス・スクールですが、開催準備・運営は学生主体で行うということで、5月より在校生である9・10期生で準備を進めてきました。

はじめに、9・10期生から15名程の実行委員を募り、5月より準備を始めました。6月、7月には高田先生の指導をいただき、アイデア出しのトレーニングを行うワークショップを開催、参加者30名程でエレベーター・ピッチやビジネスモデル・ジェネレーションなどを学びました。なかでもエレベーター・ピッチのトレーニングが印象に残っています。事前準備したアイデアを1分程度で説明し、相手と競い合うのですが、相手を代え二度三度と繰り返していくうちにアイデアのよさを上手くアピールすることができるようになります。

8月には学内で9期3チーム、10期3チームの参加による予選会を開催し、上位2チームが本選出場を手にしました。白熱したプレゼンの場となり予選会は盛り上がりましたが、本選出場がいずれも10期のチームだったのは9期生として少し残念でした。また、8月中旬には現地視察として、コンテストテーマの対象とした唐津市を訪問し地元の方々にお話を伺う機会を持ちました。

ビジネスプラン・コンテスト開催当日はあいにく雨で足元も悪くどうなることかと思いましたが、結果的には100名を越える方々に来ていただき、当



初の不安が少しずつ和らぎました。反面リハーサルの不十分さやコンテストの時間が予定より遅れるなどの準備が足りていないところもあり、課題も残るコンテストとなりました。

今回のコンテストは広く他大学との競争・交流を企図して、北九州市立大学、同志社大学、立命館大学からも参加を募りました。加えてQBSから2チームが参加し計5チームで競い合い、農業特区構想や放送事業、農産物に焦点を絞ったプラン、地域分散型エコシステム構想など、それぞれアイデアに富んだプランが発表されました。事前のワークショップのトレーニングが奏効し、最優秀賞には森林資源を活用したビジネスモデルをテーマに取り上げたQBSチームが選ばれました。

ビジネスプラン・コンテストを通じて私が学んだのは、自身が身に付けた知識や理論を元に新たなアイデアを創造し、外部へ向けて発信することの大切さです。これは本選に参加したチームだけでなく、ワークショップに参加したQBS生も感じていることではないかと思えます。本選では、ブラッシュアップがまだまだ必要なチームもありましたが、優劣はともかく、それぞれのチームがどのようなアイデアを有しているかは発信しないことには周囲には伝わりませんし、発信していくことで初めてそのアイデアが価値を持つようになるのではないかと思います。コンテスト当日で終わるのではなく、アイデアを何度も何度も練り直し作り上げていくことで最終的には素晴らしいビジネスプランが



出来上がるのではないかと思います。

最後に、ビジネスプラン・コンテストを開催するにあたり、唐津市の方々をはじめとして、多くの方々にご協力を頂きました。私たち学生中心の実行委員会だけではとても開催までたどり着けなかったと思います。この場を借りてあらためて御礼申し上げます。ありがとうございました。

木山 弘法(9期生)



## 九州大学ビジネス・スクール[MBA課程] 平成25年4月入学生 特別選抜のご案内

出願期間/2013年1月7日(月)～1月11日(金)

募集人数/若干名

選抜方法/書類審査・口頭試問ほか

■入学試験に関するお問い合わせ先

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1 九州大学貝塚地区教務課学生第四係  
TEL 092-642-4167 メールアドレス kagakusei4@jimu.kyushu-u.ac.jp  
ホームページ http://qbs.kyushu-u.ac.jp

編集発行/九州大学ビジネス・スクール

担当/QBS事務局

住所/〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1

電話/092-642-4278

メールアドレス/bs@en.kyushu-u.ac.jp

●九州大学ビジネス・スクールに関するお問い合わせ

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-19-1

九州大学貝塚地区事務部教務課学生第四係

TEL.092-642-4167

ホームページ http://qbs.kyushu-u.ac.jp/



TOPICS

QBS教員紹介

今回のQBS教員紹介は、朱 穎准教授です。



私の研究は大きく二つの分野に分けることができます。広く言えば技術革新のテーマを大きく扱っています。理論的な関心からすれば、いわゆる単に企業内部に焦点を当てるミクロレベルでのR&D活動ではなく、「技術」に携わっている多様なアクターの存在が技術革新の方向性及びタイミングにいかに関与を与えるのか、という問題について「認識論」レベルまで遡って研究しています。日本ではあまり聞きなれない研究分野でもあります。技術の「フレーミング・プロセス」という研究が欧米では盛んに行われており、私もこの分野で理論の進展を図るための実証研究を行っています。

さらにもう一つの研究テーマとして、中国企業の「ビジネスモデル」の進化に大変興味を持っており、現在アメリカの研究者ネットワークを通じて実証研究を展開しようとしています。日本では「中国ビジネス」といえば、すぐ日本型システムをいかに移転するのかという実務的な発想が多いですが、アメリカ及び中国の研究者達と一緒に仕事をすると、彼らが興味を持っているのは、「中国企業」という実証的フィールドから、これまでアメリカ主導の経営学の中でカバーできない新しい理論の創出にあるというのが分かります。こうしたアカデミック志向の違いは、研究者としてのパフォーマンスに大きく影響を与えます。すなわち、日本をベースとする「ローカル」研究をこれからずっとやっていくのか、世界を見据えた「グローバル」に発信できる研究を行うのか、研究者としては全く異なるキャリア設計が必要であると考えますが、私は後者を目指しております。

近年、海外の学会および研究機関に出かけることが多くなってきました。日本にいるとどうしても同質的な考え方に左右されやすいですが、海外で様々な研究者と話ができるため、私にとっては自分のバランス感覚を磨ける貴重な機会となっております。つい2週間ほど前、ある国際コンファレンスで私が座長を務めたグループでは、アメリカ、イギリス、フィンランド、デンマークからの研究者がおりました。みんな初対面でありながら、発表後の懇親会では古い友人のように自然に話が弾み、必ずしも自分の狭い専門分野にトピックを絞ることなく、アメリカ大統領選からイギリスのコメディアンMr. ビーンまで、ジョークを交えながらの様々な話題には多くの知識と情報が含まれておりました。日本ではまだまだ女性研究者の数が少なく、女性研究者にとってのロールモデルとなる対象も殆どいないため、漠然とした無力感に陥る人が多いですが、海外にはバイタリティーに溢れるパワフルな女性研究者も多く、男女問わず、彼ら(彼女ら)と一緒にいると、自分も常に刺激を受け向上心を持ち続けることができます。

「経営学」という領域は驚くほど学問の進化が早く、私のメンターでもあるウォートン・スクールのラフフィ・アミット(Raffi Amit)教授は「一日24時間新しいアイディを常に考え続ける努力がなされない限り、研究者ではなく別の職業を考えたほうがいい」といつも激励してくれています。このような海外の研究者とのネットワークのつながりをキープするには並ならぬ努力が必要であるものの、私にとって、広い世界を舞台に活躍したいという願望は限りなく大きいのです。

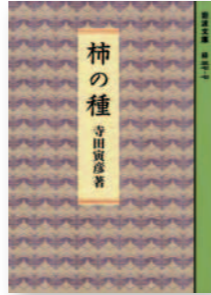
朱 穎 (アジアの産業と企業、中国ビジネス)

QBS BOOKレビュー「この1冊」

今回のQBSブックレビューは、永田 晃也教授のおすすめの「この一冊」です。

寺田寅彦『柿の種』(岩波文庫)

ふた昔ほど前の話であるが、計算機科学に関する研究会での議論を傍聴していた折、ある発想支援システムを批判的に取り上げた参加者のひとりから、「こんなシステムを当てにするより、寺田寅彦の随筆でも読んでいた方が発想のためになる」という趣旨の発言を聞いた。その時、居合わせた科学者たちのほとんどが、申し合わせたように曖昧な顔つきをしたのをみて、「寺田寅彦を読む」ということが知的ファッションとして流通する学界もあるのかと、妙な感心をさせられたことを覚えている。



寺田寅彦(1878-1935)は、東京帝国大学の教授を勤めた物理学者であり、夏目漱石の熊本五校時代の教え子として知られている。寺田の随筆が現在でも多くの読者を獲得している理由の一端は、しばしば天災に対する予見的な感想や平時の備えに関する見解が作中に記述されており、それが繰り返し注目されてきたことにあると言ってよいであろう。実際、この度の東日本大震災の直後には、1933年に三陸で発生した津波による被害について書かれた「津浪と人間」などが、防災研究の領域で何度目かの脚光を浴びることになった。

しかし、防災上の有用性を問うという水準でのみ取り上げるならば、寺田の随筆は現在の地平に驚くような再発見をもたらしてくれるわけではない。例えば、「津浪と人間」には、「過去の記録を忘れないように努力すること」や防災教育の重要性が説かれており、それらは今日なお処方としての有用性を失っていないが、ただ提言的な命題として読まれるならば、既に自明の課題と認識されている事柄ばかりである。むしろ寺田の随筆に固有の価値は、こうした提言を導き出すまでの文脈に埋め込まれた逡巡や焦燥の中に見出されるであろう。前傾の小品では、「自分のような苦労症の人間」がいくら警告しても国民も政府も問題にせず、天災に伴う破滅的な被害は繰り返されるだろうという苛酷な認識が記されている。そのような内側に向かって投げ出された言葉の中こそ、寺田の透徹した科学的な観察眼と豊かな感性によって洞察された本質的な問題が示唆されている。彼の随筆に有用性や発想のヒントを求める態度で接近しても、その韜晦された洞察に辿り着くことはできず、結局のところ寺田寅彦を読んだことにはならないのである。

掲題の書物は、冷静な観察と温かい感性を統合した洞察が、結晶したかのような短文集である。例えば、ある晩春の曇り日に永代橋を渡った寺田は、橋のたもとに見かけた四十恰好の男が、左手に生きた蟹をつまんでいることに気づく。その男が「なんとなくうれしそう顔」をしていることから、寺田は直ちに、そこから遠くない所にある彼の家と、その家で待つ「六つか七つぐらいの男の子」の姿を思い描いてみせるのである。

永田 晃也 (イノベーションマネジメント、知識マネジメント)

TOPICS

第17回 ICABE学生交流プロジェクト【釜山訪問】

9月21日から23日の3日間、朱准教授同行のもと総勢約30名で釜山を訪問しました。訪問した釜山港湾公社では、世界有数のハブ港である釜山港を船上より視察しました。釜山港は規模の追求だけでなく、スピード化や低コスト化、ITの活用による業務品質の向上にも力を入れているそうで、さらなる拡張工事により、ハブ港としてだけでなく、一大商業・観光地区へとさらに発展をします。九州の企業はその地理的なメリットを生かし、釜山港をうまく活用することで効率化やビジネスチャンスが広がるのではないかと感じました。その他の訪問先として、自動車の技術支援を行っている釜山テクノパーク、高速船の未来高速、韓国最大の水族館である釜山アクアリウムを訪問し、各産業や市場の動向、マーケティングなどについて学びました。また釜山大学にてビジネススクール生とのプログラムも実施しました。我々の訪問を大歓迎して頂いた後の、混成チームに分かれてのビジネスプランのディスカッションは活発に意見が飛び交いました。お互いの着眼点や考え方の違いが、ビジネスプランをブラッシュアップする為のエネルギーとなることを痛感しました。ICABEを通じて、参加者全員が多くを学び、大変有意義な三日間を過ごすことができました。



黒木 誓史(9期生)

KAIST/QBS 韓国と九州の経営者によるアジア市場研究交流会 開催

去る9月21日、QBS(九州大学ビジネス・スクール)とKAIST(韓国科学技術院)ビジネススクール主催による「韓国と九州の経営者によるアジア市場研究交流会」が福岡市内の共創館にて開催されました。これは両大学間に昨年交流協定が締結されたのを機会に、韓国の大手企業経営者が受講するKAISTのEGゼクティブ・プログラムの視察旅行を福岡に誘致し、地元九州企業の経営陣との意見交換の機会を提供することで、ビジネススクール間の交流促進のみならず、韓国・九州の経済界の交流に繋げようという欲張りな試みです。九州経済調査協会、九州経済連合会始め各経済団体に共催頂いたおかげで、九州側からは約30社、一方、韓国側もサムスン電子などIT企業や大手製薬・食品企業、4大銀行等の参加が得られ、出席者総数は100名に迫りました。



永田QBS専攻長及びKAIST代表の挨拶、石原福岡経済同友会代表幹事による基調講演の後、参加者は村藤、高田、平松の各QBS教員がファシリテーターを務める3つの業界別分科会に分れ、それぞれアジア戦略や韓国・九州企業間の協力事例、そのための課題等について活発な意見交換を行いました。また、QBS修了生、在校生が通訳として活躍してくれました。

QBSにとってはKAIST、地元経済界双方との連携強化に繋がりましたが、同時に政治問題から交流事業の延期・取止めが続く中で、両国・地域間の今後の交流に繋がる場を提供できたことは有意義でした。

平松 拓 (ファイナンシャル・マネジメント、マネジメント・コントロール)

修了生紹介



奥山 茂樹さん (1期生)

第一期生として修了式を迎える頃、新規事業のマーケティング担当を命じられ、最初の仕事はプロモーションでした。なかなか理解が得られない社内を、自分で書いたキャッチコピーと絵コンテ片手に説得して回り、なんとか実施に漕ぎ着け、ひと月で売上げが2.5倍に増えた時はQBSの威力を思い知りました。出頭先生のマーケティングの講義やゼミを始め、QBSで習い立てのノウハウを全投入した結果だったからです。その後この事業のマーケティングを7年間担当し、数億円だった売上げは数百億円に向上しましたが、その間一貫してQBSのノウハウを背景に仕事をし、ピンチの時は先生や学生のネットワークに何度も助けられました。

さて、入学から10周年の節目に最近考えることがあります。前述の事業は、利益体質になった後、新サービスや顧客獲得への新規投資を止めてしまいました。人が変わり組織の考え方が変化したため、「このまま既存顧客を維持すれば永遠にパラダイスが続く」と錯覚してしまったのです。顧客はとても敏感なもので、かつての魅力を失ったブランドから離れつつあります。QBSで聞いたのか自分の解釈なのか定かではありませんが、思い出す言葉は「企業は成長を止めた瞬間から老化が始まる」です。自分の得たポジションに満足し成長を止めれば魅力は失われます。10周年を迎えたQBSにおいても、競合参加が立て続けに発表される中、ファカルティ、アドミ二、学生、修了生が各々の責任において成長へのシフトアップをもう一度誓いたいものです。



永池明日香さん(5期生)  
所属 ㈱東レ経営研究所

QBSを修了し、3年以上が経ちました。最近改めてQBSでの2年間が私にとって大きな意味を持っていたと感じています。今の仕事に繋がった理由の一つはQBSを修了しMBAを取得しているからです。私は現在、社内で発行する経営機関誌の編集業務を担当していますが、執筆を探る際などQBSでのネットワークにはとても助けられています。

そんな私は、自分のキャリアや人生をリアリティを感じたいという気持ちで、東京での仕事を辞めて福岡に転居し、QBSに入学しました。東京にも学校は数多くあるのに、なぜQBS?その理由はいくつかありますが、やはり元QBS教授であった父が、折りに触れ話していたQBSがどんなところなのか興味があったことが大きかったと思います。実際に入学したQBSでの毎日はとても刺激的で、個性豊かで尊敬できる先生方や多くの誇れる仲間と出会ってくれました。そして、QBSで学んだ様々なものの考え方や知識は、私の糧となっています。まだ発展途上の私ですが、もっと誇れる自分になることで、QBSに恩返しできればと思っています。